

東日本大震災時の地震・津波避難に関する 集落ヒアリング調査

〔主な調査結果〕

平成24年11月30日

内閣府(防災担当)

集落を対象とした傾聴方式による調査（1/2）

■ 本調査の特徴

- 一問一答形式によるヒアリングではなく、傾聴方式を採用し、「地震発生から避難が完了するまで」のことを調査対象者のペースでお話いただいた。
- 「集落」というコミュニティを対象とし、各集落について20人前後の方々のお話を伺った。
- 前述のような集落を対象とした傾聴方式を採用することで、調査結果に次のような特徴が見られた。
 - ・ 津波の犠牲になった方々の行動について、複数の方々からの確度の高い情報を得ることができた。
 - ・ 自分自身の行動に加え、周囲の方々がとった行動、周囲と自分が互いにどのような影響を与えたか、さらにはそれらを総合して各集落の避難行動のおおむねの全体像について把握することができた。

■ 犠牲になった方々の行動（例）

- 避難しなかった・できなかったために被災した
 - ・ 特に昭和35年のチリ地震津波の経験から、「まさか津波がここまで来るとは思わなかった」と過去の経験が逆に作用した
 - ・ 地震直後に予想された津波の高さが安心材料となって逆に作用した
 - ・ 車がないために移動手段がなく、自宅2階で犠牲になった
 - ・ 車で避難しようとして渋滞に巻き込まれ、逃げ切れずに亡くなった人がいた
- 周囲の避難を支援して逃げ遅れた
 - ・ 寝たきりの老人1人を助けるために、消防団員が連れ出すために向かい、消防団員6人が亡くなった
 - ・ 自力で避難できない高齢者を置いて逃げるわけにはいかなかった人がいた
- 避難した後に自宅等に戻り、第二波・第三波によって被災した
 - ・ 飼い犬を逃がそうとして帰宅し、亡くなった人がいた
 - ・ 高台等に1度避難したものの、貴重品や防寒具等を取るために自宅等に戻り、被災した
- 避難した場所が被災した
 - ・ 事前に指定されていた避難場所が低い場所にあり、被災した

集落を対象とした傾聴方式による調査（2/2）

■ 避難した方々の行動（例）

- 自己判断で避難した
 - ・ 津波に関する伝承が強く残っている地域では、大きな揺れが発生した時点で、住民が「地震＝津波」と判断して自主的に避難した
 - ・ 「津波は30分で来る」ということを日頃から知っていた
- 声掛けによって適切に避難した
 - ・ 集落内で知らない人はいないので、互いに声を掛け合い、避難した
 - ・ 避難支援者（区長や消防団等）が誘導しただけでなく、住民同士が互いに声をかけながら避難した
- 行政による情報提供によって適切に避難した
 - ・ 行政が防災無線で「避難せよ」という切迫感のある呼びかけを行い、住民が迅速に避難した
 - ・ 事前に指定されていた避難場所が集落から遠く、停電していたため、行政担当者が集落に近い高台にある場所を避難場所として誘導した
 - ・ 防災行政無線が停電等のために機能しなかった地域では、住民が警報等の情報を得られなかった

調査結果概要

	犠牲になった方々の行動	避難した方々の行動	将来に語り継ぐべき教訓
① 避難意識	・「自分は安全だ」と判断して避難しなかった ・高台等に避難せず、自宅の2階等で亡くなった ・家族が揃うのを待ったために、逃げ遅れた ・津波や船を見に行った ・地震後の後片付けをしていて逃げ遅れた ・避難後に自宅等に戻った ・適切な判断ができなかった(迷ってしまった) ・本人が避難を諦めてしまった	・避難の意識 - ー津波避難を意識した - ー津波避難を意識しなかった ・避難のきっかけ - ー自己判断 - ー警報や周囲からの呼びかけ - ー津波を見た	・津波てんでんこ
② 情報伝達	・警報の津波高を聞いて安心し、家に戻った	・情報の入手 - ー警報を聞いた - ー警報を聞いた記憶がない	・情報提供・入手のあり方 (防災行政無線、ラジオ、携帯電話、警報)
③ 避難場所	・事前に指定された避難場所が被災した	・避難場所 - ー事前に決めていた場所への避難 - ー決めていた場所以外への避難	・避難場所・避難路のあり方 (不適切な場所・経路の見直し、避難場所に必要な設備)
④ 事前準備	・車で避難し、渋滞に巻き込まれた ・交通ルールや避難訓練時のルールを守って、逃げ遅れた ・避難するための移動手段がなかった ・周囲の人の避難を支援して逃げ遅れた	・移動手段(徒歩もしくは車) ・要援護者(高齢者、子供等)への支援 ・消防団員の行動 ・避難場所の状況(寒さ、トイレ等)	・津波避難訓練や平時からの準備の重要性 ・車による避難 ・避難支援者のあり方 ・災害時要援護者への支援
⑤ 防災教育	—	・伝承等を教訓にして避難 (過去からの伝承や自らの体験、訓練)	・記録に残すことの重要性 ・危険行動 ・その他

犠牲になった方々の行動

※同一のコメントが複数箇所に記載されていることがある。

犠牲になった方々の行動

【① 避難意識】

■「自分は安全だ」と判断して避難しなかった

- 高台の中腹に住んでいる人たちが、「ここまでは、まさか」という考えで逃げ遅れたり、逃げなかったりして亡くなった。
- 波が防潮堤を越えてきていたのを見て、周りに避難するように必死で叫んでいた人がいた。だけどその人は自分のところまで来ると考えないで、他人には「津波が来たから逃げろ」と言っている間に、自分自身が流されてしまった。
- 地域で亡くなった方全員が昭和35年のチリ津波の経験者だった。この人たちは「鉄筋コンクリートで2階建て3階建てを作っておけば津波が来ても大丈夫だ」と思っている人たちだった。要するに経験が仇になった。いったん避難場所まで避難しているけど、「あ、あれを忘れた」と言って戻って被災している。昭和35年のときは遠くから来た津波だから、じわじわじわと水位が上がっていった。だからそのときは水が来てから走って逃げれば逃げられた。今回も同じように思っていたのだろう。
- 区長が「津波ですから逃げてください」と言ったので、日ごろからある程度訓練している地元の人たちは避難した。この人たちは「たぶん来ないだろう」と思っていたかもしれないが、逃げた。一方で商店街や工場の通勤族の人たちやアパート暮らしの人たちは津波の経験がなく、避難訓練にも参加しないので、津波がどういうものかわからない。
- 昭和35年のチリ津波の経験が頭にあり、2階にいれば大丈夫だなと判断して亡くなった人もいる。
- 自宅にいて、まわりから避難するよう声をかけられていたにもかかわらず自宅に残って逃げ遅れた。
- 逃げないで洗濯物を入れているのか何かしている人たちがいた。そのときは小学校の裏を津波が上がっているようなときだったのでその人たちにも「すぐに逃げろ」と言った。「わかった、わかった、津波がきたらすぐに裏の山に逃げるからいいから」と手を挙げたので「よし」と思った。けれども、夫婦でやられてしまったみたいだ。おそらく1度家の中に入って、津波にのまれたのではないかな。
- 隣の家の人鉄筋コンクリート2階建ての家に住んでいたが、2階に上がったなら大丈夫だと思って2階に上がって、2人とも亡くなった。
- 家の前の酒屋の夫妻が3階建ての自宅の2階で津波に遭って亡くなった。チリ津波の後に鉄筋の3階建ての頑丈な家にした。「2階に上がるから大丈夫だ」と言ったそう。屋上は何ともなかったの、屋上に上がれば助かっただろう。
- 自宅は大丈夫だと思っていたらしく、2階から他の人たちに「早く上がれ、早く上がれ」と避難誘導をしていたらしい。しかし、水が押し寄せてきて、その人自身が流されてしまった。近くにいた人は「助けて～」という声を聞いたそう。
- 高台に住んでいた親戚も被害に遭ってしまった。「ここなら大丈夫」と思っていたはずだから、その油断が招いた惨事だと思う。
- 「チリ地震のときに津波はここまで来なかったから大丈夫だろう」「コンクリートの家だから丈夫で流れないだろう」と考えて避難しなかった人がいる。
- 津波は来ないだろうということで自宅に残っていた人が津波に巻き込まれている。たいしたことないと判断した理由は、チリ地震の経験を踏まえたからだろう。

犠牲になった方々の行動

【① 避難意識】

■ 高台等に避難せず、自宅の2階等で亡くなった

- 家の前の階段に座って、親子2人流れた人もいる。
- 家の2階にいて、家ごと流された人がいた。
- 昭和35年のチリ津波の経験が頭にあり、2階にいれば大丈夫だなと判断して亡くなった人もいる。
- 自宅にいて、まわりから避難するよう声をかけられていたにもかかわらず自宅に残って逃げ遅れた。
- 逃げないで洗濯物を入れているのか何かしている人たちがいた。そのときは小学校の裏を津波が上がっているようなときだったのでその人たちにも「すぐに逃げろ」と言った。「わかった、わかった、津波がきたらすぐに裏の山に逃げるからいいから」と手を挙げたので「よし」と思った。けれども、夫婦でやられてしまったみたいだ。おそらく1度家の中に入って、津波にのまれたのではないかな。
- 隣の家の方は鉄筋コンクリート2階建ての家に住んでいたが、2階に上がったら大丈夫だと思って2階に上がって、2人とも亡くなった。
- 家の前の酒屋の夫妻が3階建ての自宅の2階で津波に遭って亡くなった。チリ津波の後に鉄筋の3階建ての頑丈な家にした。「2階に上がるから大丈夫だ」と言ったそうだ。屋上は何ともなかったのだから、屋上に上がれば助かっただろう。
- 自宅は大丈夫だと思っていたらしく、2階から他の人たちに「早く上がれ、早く上がれ」と避難誘導をしていたらしい。しかし、水が押し寄せてきて、その人自身が流されてしまった。近くにいた人は「助けて～」という声を聞いたそうだ。
- 「チリ地震のときに津波はここまで来なかったから大丈夫だろう」「コンクリートの家だから丈夫で流れないだろう」と考えて避難しなかった人がいる。
- 津波は来ないだろうということで自宅に残っていた人が津波に巻き込まれている。たいしたことない判断した理由は、チリ地震の経験を踏まえたからだろう。
- 車がなくて徒歩以外の避難手段がなく、家の2階に避難するしかなかった人がいる。

犠牲になった方々の行動

【① 避難意識】

■ 家族が揃うのを待ったために、逃げ遅れた

- おばあさんが孫を連れて「逃げるよ」と最初は言っていたが、「もう1人学校から帰ってくるから待っている」と、自宅に残った。自宅で津波にのまれ犠牲になった。

■ 津波や船を見に行った

- 亡くなった男性は、地震が発生したときは水門のそばの温泉に入っていた。地震がすごかったから、避難するために温泉の従業員がお客さんを乗せた。従業員はその男性にも避難するマイクロバスに乗れと言ったが、男性は「俺は自転車で来ているから」と乗らなかった。その後、波を見に行っちゃったらしい。途中で流されて通りの瓦礫の中に入ってしまった。
- 高台に住んでいる方が亡くなった。船を見に行くと言っていたが、家に戻ったけど、家の前の辺で見つかった。
- 津波を振り返って見ていて波にさらわれた人がいる。
- 船で逃げるタイミングが悪かったのか、船が沈没したというのがあった。波にのまれた人も、見ている内に波にのまれたというのはある。気を失ってしまい、そのまま船と一緒に流されてしまった人。足を骨折して動けなくなり、そのまま船ごと流されてしまった人がいた。
- 一度は避難したものの、海岸を見ようと避難場所から下へ戻った人は亡くなったと思う。

■ 地震後の後片付けをされていて逃げ遅れた

- 自営業をやっている人が亡くなった。コンピュータとか仕事のものを2階にあげていたんだと思う。2階で遺体が見つかった。
- 嫁は揺れが収まってから、コタツから数歩の流し台に何かを取りに行った。そこで、波がきて物が当たって亡くなってしまった。
- 地震で落ちたものの片づけをしようとしていて流された人もいる。
- 地震が来たからびっくりしてまず外に出てきたのに、地震がおさまって家の中に入ってしまう、亡くなった人がいる。

犠牲になった方々の行動

【① 避難意識】

■ 避難後に自宅等に戻った（「もう津波は来ない」と判断した）

- 一度避難所に逃げた後、地震から津波が来るまでの30分もたたないうちに「そんなに大きな津波は来ないだろう」と思い、家に戻ったり車を取りに行ったりして避難所を離れた方々が、津波にのまれて亡くなった。
- 第一波の後に家に戻ってしまって、流された人もいた。
- 第一波だけでまたうちの中に入ってしまって流されて、未だに行方不明になっている人がいる。
- いったん避難したが、津波到達までにはまだ時間があるだろうと自宅へ戻ってきた人が津波に巻き込まれている。避難所にいた人が、「なんであの人が亡くなっているの？避難所にいたのに」と話していた。
- 津波が来てようが来まいが、「津波の準備したか？」っていつでも喋るおばあちゃんがいた。その人がすぐそばで流れていった。ちゃんと逃げる準備はしてたのに、実際の津波を経験してないから、第二波・第三波というものが分からなかったようだ。その人は一度は会ったのに戻って行ってしまって流された。

■ 避難後に自宅等に戻った（家族やペットを迎えに行った）

- 集落を回って支所に行くときに、自宅に戻ろうとする人にすれ違った。津波が来るからダメだと言ったが、実家に体の不自由なおばあさんがいると戻ってしまった。その人は津波に巻き込まれ亡くなってしまった。
- 水が来たと言われたときに逃げようと思ったみたいで、車で学校の裏を走っていったみたいだが、亡くなった。家に残った人や物を取りに行った人が亡くなったようだ。
- むしろ津波まで時間の余裕があったので、「犬を連れてくる」と言って自宅に戻り、流されてしまった人がいた。
- 飼い犬を逃がそうとして帰宅して亡くなった方もいた。

犠牲になった方々の行動

【① 避難意識】

■ 避難後に自宅等に戻った(貴重品を取りに戻った)

- 姉妹で保育所までいったん上がってきたのに、波がここに来ないうちに姉の方はものを取りに戻ったらしい。「なんであんたは来たけど、姉さんは来なかったのだ」と聞いたら、「一緒に来た。後ろを見たら戻ったみたいで姉さんはいなかった」ということだった。
- 地域で亡くなった方全員が昭和35年のチリ津波の経験者だった。しかも9名のうち6名が夫婦。この人たちは「鉄筋コンクリートで2階建て3階建てを作っておけば津波が来ても大丈夫だ」と思っている人たちだった。要するに経験が仇になった。いったん避難場所まで避難しているけど、「あ、あれを忘れた」と言って戻って被災している。昭和35年のときは遠くから来た津波だから、じわじわじわと水位が上がっていった。だからそのときは水が来てから走って逃げれば逃げられた。今回も同じように思っていたのだろう。
- 水が来たと言われたときに逃げようと思ったみたいで、車で学校の裏を走っていったみたいだが、亡くなった。家に残った人や物と取りに行った人が亡くなったようだ。
- 「戻って判子を持ってくるから」と行った人が亡くなったとか聞いた。周りの人たちは「いいからここにいろ」と言ったが「まだ来ないから判子を持ってくっぺ」と下がって亡くなったと聞いた。
- 亡くなった方はいったん避難場所に逃げたのに「あれ持ってこなくてはならない」とか「忘れものをした」とか戻ってやられている。
- 何かものを取りに行こうとした人の話はよく聞く。取りに行き、津波が来て流されて亡くなった人もいる。
- 自宅に戻った人が被害に遭った。家族6人で車1台に乗っていて、1度避難したが、赤ちゃんのミルクやおむつを取りに戻って、波にのみ込まれ一家で亡くなった。
- 子供のおむつを忘れて取りに戻り、家族で戻って亡くなった家族もあった。
- 1年前のチリ地震のときは避難しても全然津波が来なかった。その経緯から今度もすぐ帰れると思って、何も用意せずに避難し、大事なものを取りに行くと家に戻ってしまった人がいた。その方たちは津波の犠牲になった。
- 1度は避難場所に避難したにもかかわらず、現金等を取りに家に戻って津波に遭った人がいる。

■ 避難後に自宅等に戻った(防寒具を取りに戻った)

- 亡くなった女性は、すぐそばの山に1度上がったが、「寒いから衣類を持ってくる」と自宅に戻って波にのみ込まれた。周囲で「戻るな、戻るな」と言った人もいたが、制止を聞かずに行ってしまった。亡くなった状況を見たら毛布にくるまって寝ていた。
- 50代の娘がおじいさんとおばあさんと避難したが、おじいさんたちに寒いと言われたので娘が防寒具を取りに自宅に戻り、津波の犠牲になったという話も聞いた。

犠牲になった方々の行動

【① 避難意識】

■ 避難後に自宅等に戻った（海を見に行こうとした）

- 一度は避難したものの、海岸を見ようと避難場所から下へ戻った人は亡くなったと思う。

■ 避難後に自宅等に戻った（戻った理由は不明）

- 避難後、私もいったん家に戻ろうとしたが、他にも戻った人はいたようで、そこで亡くなってしまった人もいたようだ。

■ 避難後に畑に戻った

- 苺が最盛期を迎えハウスの戸締り（暖房のため）に戻ったと思われる2名が津波の犠牲になった。
- 1回避難して戻った人もいる。「避難してくれ」と言ったが「畑を閉めてこないとダメだから」とわざわざ畑に戻った人もいた。そういう人で亡くなってしまった人がいる。
- ほとんど農家なので、苺のハウスを見に行って津波に巻き込まれてなくなった人もいる。

犠牲になった方々の行動

【① 避難意識】

■ 適切な判断ができなかった(迷ってしまった)

- 避難を迷っていた方もいたみたいで、そういう方が被災された。
- 高齢者が「どうしよう、どうしよう」と言っていたので、「津波がくる」と注意をしたが、逃げようとはしなかった。そういう方が亡くなった。
- 消防団として巡回中、外にいる人に関しては避難するように声をかけたが、避難を促しても全然言うことを聞いてくれない人もいて、その方は一家で亡くなった。こちらの言うことを聞いてくれないと思えば残念だ。
- 区長が逃げる際、スーパーの中に5～6人いたのを見た。区長は津波が来ているのが見えていたから、「窓の外から逃げろ」と言ったが、みんな逃げる気がなかった。その人たちは水が来ているのが見えず、流されてしまった。
- 周りの人が「逃げるよ」と声をかけたら、「逃げる、逃げる」って答えたが、その人は結局逃げずに亡くなった。あのとき、「逃げろ」って(もっと強く)言えばよかったと言っていた。
- 自分としては「様子を見に行ってくる」感覚で、ひとりで高台にのぼって、一緒に住んでいた祖母を置いてきてしまった。そのあと津波がきて上から叫んだが、本人は自分で避難できず、間に合わなかった。すぐに一緒に逃げればよかった。
- 集落で亡くなった方々の7割以上が毎年の避難訓練に参加していない人たちであった。
- 油断や迷いから避難が遅れた方などが犠牲になった。
- 意外に大きい波だったので、横着で逃げなかった人は亡くなった。
- 年寄りや自宅から離れたくないとの理由で「たいしたことない」と言って避難しない者もいた。

■ 本人が避難を諦めてしまった

- 「もういいから」「歩けない」「避難所に行ってもどうにもならない(周りに迷惑をかけてしまう)」と言う人もいた。周りの人たちは「逃げなさいよ」と声は掛けただけで、そのときは「はい」と返事はしていたようだった。

犠牲になった方々の行動

【② 情報伝達】

■ 警報を聞いて安心してしまった

- 「3m」のサイレンを聞いたのもあってか、「(10mの防潮堤もあるし)3mの津波なら大丈夫だろう」と思って、再び下の家などに戻った人は亡くなった。サイレンでの伝え方がまずかったと思う。

犠牲になった方々の行動

【③ 避難場所】

■ 事前に指定された避難場所が被災した

- 指定避難場所に避難したが、避難場所が津波にのまれて、多くの方が亡くなった。

犠牲になった方々の行動

【④ 事前準備】

■ 車で避難し、渋滞に巻き込まれた

- 時間が経つにつれて車が渋滞した。車で避難しようとした人の多くは、そのまま津波に流されただろう。
- 車で避難しようとして渋滞に巻き込まれて、逃げ切れずに亡くなった人がたくさんいる。

■ 交通ルールや避難訓練時のルールを守って、逃げ遅れた

- 足の不自由なおばあちゃんがいる、一緒に見回りをしていた行政職員が車で避難させようとした。一方通行の道を守って行こうとしたら、波が来て二人とも流された。
- 避難訓練の際に、「大きな地震のときには避難階段を上がってトンネル横の広場に避難すれば安全だ。ただし避難階段を上るには足元が悪い。高齢者は避難階段を上るのではなく、遠回りして大通りに出れば、サンダル履きでも裸足でも、トンネル横の広場まで行ける」との説明を受けていた。亡くなった年配の女性は、遠回りとなるその道を選択して、途中で波にのまれた。道路を隔ててすぐ隣だからそこから上がればよかった。

■ 避難するための移動手段がなかった

- 家族が出かけているなどの理由で単身での避難が難しかった年配者が犠牲になった。
- 車がなくて徒歩以外の避難手段がなく、家の2階に避難するしかなかった人がいる。

犠牲になった方々の行動

【④ 事前準備】

■ 周囲の避難を支援して逃げ遅れた

- 親戚とか身体の不自由な人を助けようとして亡くなった人もいた。
- 寝たきりの老人1人を助けるために、消防団員が連れ出すために向かい、消防団員6人が亡くなった。
- 下の人が年寄りを車いすに乗せて避難しようとしたら、津波にさらわれてしまった。
- 川を上がった所に足が不自由で寝ていたばあちゃんが住んでいた。そのばあちゃんを東京から預かりに来ていた嫁さんと2階で2人で亡くなった。
- 消防団の人の中には、目の前にダメそうな人がいて助けようとして亡くなった人もいる。
- 養護センターで介護中に助けようとして流された人が亡くなった。地域全体で13人が亡くなった。
- 夫が寝たきりで一人で逃げるわけには行かず、自宅に残ると言った奥さんがいた。寝たきりの人はほとんど家にいた。
- 自力で避難できない高齢者を置いて逃げるわけにはいかなかった人がいる。

犠牲になった方々の行動 その他

■ 周囲に助けを求めたが、間に合わなかった

- 「助けて！」「俺は〇〇だ！助けて！」という声を聞いた人もいたらしい。でも、流されてしまったら助けてあげられない。その人もやっとなんかに掴まって水から逃れているような状態だった。
- 足の不自由な奥さんをご主人と娘さんが引っ張り上げようとしたが、引っ張り上げることができず手を離してしまい、海にもっていかれてしまったという話を聞いた。
- おばあさんと一緒に逃げていたが、津波に巻きこまれ、手が離れてしまったおばあさんが波にのまれてしまった人もいる。
- 80歳すぎの老人女性が亡くなっていた。亡くなった女性は要介護だった。波が来るからと義理の弟が手をつないだ瞬間に大波が来て、階段の2段目くらいまで上がったが一緒に流されてしまった。義理の弟は助かっている。

■ 避難途中に流されてしまった

- 保育園まで水が来た。車で逃げようとしたときに水が来て、ドアに挟まって亡くなった人もいる。
- 地震のときに道路を歩いていて、たぶん小学校辺りで流されていたと思う。
- ガソリンスタンドにガソリンを入れに来た人が2人で立ち話をしているときに津波に巻き込まれ、亡くなっている。

避難した方々の行動

※同一のコメントが複数箇所に記載されていることがある。

避難した人々の行動

【① 避難意識】地震直後における避難に対する意識(津波・避難を意識した)

■「地震＝津波」という意識があった

- 船に関係する仕事の人、昔から大きな地震が来たら津波が来るという意識があるので、自分も津波が来るという感覚があった。
- 揺れの大きい小さいに関わらず、ある程度の地震が来たら津波が来るので避難しなくてはならないと思った。
- 揺れの大きさから津波が来るなと直感的に思った。ふだん町内で訓練しているので、いつも地震後は津波という意識を持っていた。
- 昭和35年のチリ地震津波を経験していたので、「こんな大きな地震が起きたから、絶対津波が来る」と思った。
- 震度4、マグニチュード6は津波に備えるひとつの目安になっているので、すぐに津波が来ると思った。
- とにかく子供の頃から両親から津波の話も聞いていたし、これまでの歴史からも津波は大きいのが来ると確信していたので避難した。

■ てんでに避難した

- 子供たちに連絡を取ろうとは思わなかった。「地震が起きたらてんでんこ」だから、まず自分たちの身を守るのが第一。それだけを考えていた。

■「30分以内に津波が来る」という意識があった

- 「津波は30分で来る」ということを日頃から知っていたので、その30分で何ができるかが勝負だと思った。

避難した人々の行動

【① 避難意識】 地震直後における避難に対する意識(津波・避難を意識しなかった)

■ まったく想定しなかった

- 津波が来るとは全く考えてなかった。

■ 揺れの大きさにパニックになった

- 地震でパニック状態になっていて、津波のことは考えなかったと思う。

■ 地域に津波が来たことがない

- 地震で津波は考えなかった。そんなに大きい津波が来るとは夢にも思わなかった。過去にもなかった。

■ 津波のことは頭によぎったが、自分のところまでは来ないだろうと思った

- 津波は来るかもしれないと思ったが、来てもたいしたことはないだろうと思った。過去のチリのときも十勝沖のときもたいした津波ではなかった。防潮堤も堤防も昔より高く、強くなっているだろうと、油断し、たかをくくっていた。
- 自宅が高台にあるので、これだけの高さがあれば絶対に大丈夫だと思っていたので、防災意識はゼロだった。

■ 津波警報を聞いたが、自分のところまでは来ないだろうと思った

- 地震発生直後に警報を聞いたが、3m程度の津波なら大丈夫だと思い、逃げずにいた。
- 1年前のチリ地震で津波が来るということで小学校に避難したことがあったが、結局来なかった。だから今回も来るとは思っていなかった。

■ 津波が来るまで時間に余裕があると思った

- 余震が何度も何度も来たが、それほど危機感はなく、余裕な気持ちでいた。ラジオで津波警報3mと聞いたが、防潮堤は高くなったし、満潮は19時だから17時を目処に避難すればいいと思った。自分は大丈夫だと侮っていた。

避難した人々の行動

【① 避難意識】 避難のきっかけ: 自己判断

■ 「地震=津波」だから避難しなければいけない、と判断した

- 揺れの大きい小さいに関わらず、ある程度の地震が来たら津波が来るので避難しなくてはならないと思った。
- やはり尋常ではない揺れの大きさに津波は確実と思っていたところに、広報で大津波警報が出て、逃げるに至った。

■ 過去の経験に基づいて判断した

- 昭和35年のチリ地震津波を経験していたので、「こんな大きな地震が起きたから、絶対津波が来る」と思い、着の身着のままで逃げた。
- 避難が必要だと感じたきっかけは、地震があったら津波という気持ちがあったからである。昭和8年に起きた津波のときは、5歳だったが、おばあさんに手を引っ張られ、逃げた思い出がある。

■ 日ごろから避難の準備をしていた

- 数日前に大きい地震があったときも避難した。そのときの経験を踏まえて、何かあったときのために通帳、ハンコ、お金などバッグを準備していた。着替えもして、車の用意もして、玄関以外の鍵も閉め、いつ何があっても出られるように避難の準備をした。準備万端になったときに、警報が鳴った。

■ 訓練に基づいて避難した

- 母親は着の身着のまま、私自身は防災のヘルメットと防災ザックを取って訓練どおりにした。
- 地震があったら津波が来るという防災訓練が役立ち、この揺れで逃げなければと思い、高い方へ逃げた。

■ 海が引くのを見て、津波が来ると判断した

- 地震後すぐに海が引いた。これはただ事ではない、大津波が来ると直感的に思った。
- 強さも長さも、かつて経験のない揺れだった。津波の場合、引く場合とそうでない場合があるようだが、このときは波がかなり引いたので、津波に警戒しないとダメだと思った。

避難した人々の行動

【① 避難意識】 避難のきっかけ:警報、周囲からの呼びかけ

■ 警報

- 地震のあとにラジオで大津波警報を聞いて、すぐ避難した。揺れがあった時点では、津波までは意識していなかった。
- 車で自宅に戻る途中、津波警報を聞いた。「3m」と伝え、すぐに「6m」と変わった。6mの津波と聞いて避難の必要を感じた。
- 役場の放送が、戦争時の空襲警報のようなサイレンになり、「高台に避難せよ」と強い口調になった。その放送で避難の必要性を感じた。

■ 家族からの呼びかけ

- 夫が魚市場での仕事から車で戻ってきて「何しているんだっ、来なっ」と言って、すぐ向かいの山に避難した。
- 息子から「母さん何してるんだ、大事な物を早く持ってこい」と言われ、大事な書類を持って、長靴を履いて外へ出た。
- 甥が車を乗り付けていて「早くしな！！早くしな！！」と怒鳴っていた。何のことも、全然わからなかった。ただ、甥が怒鳴っていることにびっくりした。何度も言うので財布の入れてある袋を持って外へ出た。

■ 消防・警察からの呼びかけ

- 消防団の人が「警報が出ている。大津波が来るから逃げて」と言った。「津波から避難する」という意識よりも、「一人で家にいて地震が怖い」という意識から避難した。
- 船溜にいたら、消防と警察が回ってきて、「ここを離れろ。ここにいるな」と避難を指示され、すぐ避難した。

■ 近所の人や通りすがりの人からの呼びかけ

- 男の人たちが、「下(海の方)に下がるな！上に上がれ！高いところへ逃げろ！」と叫んでいた。車に乗りながら避難を呼びかけている人もいたし、走りながら呼びかけている人もいた。数人が声かけ誘導をしていて、それが避難のきっかけになった。
- 集落内の独居老人を近所に住む親戚や顔見知りが車に乗せて一緒に避難した。この集落で知らない人はいないから、歩いている人を見たら乗せるのが普通だった。普段から集落内の結びつきが強いので、このように救いの手をさしのべる行動は自然に行われていた。
- 「テレビで大きな津波が来るって言ってたぞー！」という声がした。それを聞いて、避難しようと思った。
- 漁師たちが血相を変えて、「何やってるんだ、早く逃げろ」「とにかく津波が来るから逃げろ、高台に行け」と言ってきた。

避難した人々の行動

【① 避難意識】 避難のきっかけ:津波を見た

■ 川の水が引いた

- 外に出て川を見たら、川の水が引いていた。急に鳥肌が出て怖いと思った。「大きい津波が来るのでは？」と思い、一応、避難袋を車に積んで、急いで避難した。

■ 波が川を遡上した

- 川から逆流した波があふれてきた。それを見て、「これはまずい」と思い、玄関の戸だけを閉めて車で避難した。

■ 津波が堤防を越えた

- 津波の第一波が来てから車で避難する人が多かった。
- 窓から家の外を見たら、浜に続く道路から津波が来たのが見えた。それがきっかけで、波に追われながら命がけで逃げた。
- 大津波警報は消防車の呼びかけで初めて聞いた。しかし呼びかけを聞いても、避難せず家にいた。今まで警報が出てもたいしたことはなく、5～10cm程度の津波しか来ないだろうと思っていた。第一波を見た後、とりあえず貴重品はリュックに入れて背負っていた。近所の人と川を眺めていて、第二波が堤防を越えてきて、初めて逃げようと思った。
- 白い煙を見て、最初は火事かと思った。その後、自宅と道路を挟んで向かい側の家が2～3軒、浮き上がってこちらに倒れかかるように流れてきたのを見て、逃げなければならないと思った。1階に靴を取りに行くことができなかったのも、裸足のままで、洗濯干しに使っていたはしごを伝って2階から逃げた。
- 目の前の溶接所の鉄筋の建物とところまでフワッと海の方から家の方に向かって波が来ていた。自分は海岸育ちだけど、津波を見たことがなかったので、腰を抜かすほどの驚きだった。
- 自宅の車を高台に上げているときに水が来たもんだから「ばあちゃん、水だ！」と言われて裏のお社の所に上がって逃げた。
- 第何波かで線路を超える大きい波が来て「ここも危ないかもしれない」と思って裏山に行った。
- 自宅の目の前の家が浸水したので、みんなで「津波が来たから(高台に)上がれ」と避難した。
- 道路向こうのコンビニストアの後ろ(海の方)から水がスーッと来るのがみえた。

避難した人々の行動

【② 情報伝達】 警報の入手状況

■ 警報を聞いた

- 「避難せよ～」という警報が聞こえた。
- 津波警報が無線から流れてきた。たぶん5m～6mと言っていたと思う。
- 防災無線は聞こえた。「浜には近づかないで、早く高台へ」という声がここまで聞こえていた。
- カーラジオで「大津波がきます！」と尋常じゃない声での放送を聞いた。
- 警報は「大津波が来ている」と言っているだけで、その後どの様であったかは覚えていない。
- 最初の頃は防災無線が鳴っていたような気がするが、段々聞こえなくなった。「津波が来るから避難しろ」というアナウンスがあったような気がする。

■ 警報を聞いた記憶がない

- 不思議なことに、地震発生直後に防災無線を聞いたという記憶がないし、消防も見かけなかった。正気でなかったのかもしれない。

■ 防災無線が機能しなかった

- 集落内には5つの防災無線があるが、停電のためにまったく役に立たなかった。
- 各家庭に受信端末を置くタイプの防災無線を整備していたが、電源を切っている家も多く、大津波警報などの放送は聞いていた家と聞いていない家があったのではないか。

避難した人々の行動

【③ 避難場所】 避難する場所の判断

■ 事前に決めていた場所への避難

- 地区の津波避難訓練で、避難場所を確認していた。そのときの記憶があったため、多くの住民はその場所に避難した。
- 避難場所を事前に家族で取り決めていた。
- 日ごろから津波が来るときは小学校へ行くと家族間で話していたし、最終避難所になっていたことから直接小学校へ避難した。
- 避難訓練のときに決まっていたので、小学校の体育館へ避難した。

■ 事前に決めていた場所ではないところへの避難

- 地区で指定されていた避難場所に行くためには川を越えなければいけないので、高台にある別の場所に避難した。
- 避難場所は小学校と指定されていたが、やはり子供が小さいと、人がゴチャゴチャたくさんいるところでは落ち着かないし、いろいろ大変だと思い、高台の駐車場に行った。車の中にいると目も手も届く。
- 役場の放送が公共の保養所に避難するように言っていたので、歩いて避難した。その場所は事前に指定された避難所ではなかった。
- 妻が公共の保養所にいるとのメールがあったので、向かった。本来指定されている避難場所は集会所だが、その電源が止まっていて真っ暗な状態だったため、役所が「公共の保養所へ避難するように」と案内していたそうだ。

避難した人々の行動

【④ 事前準備】移動手段

■ 徒歩で避難した理由

- 車での避難は禁止されていたので徒歩で行った。
- 避難場所へは、津波訓練のときから徒歩で逃げるよう訓練していたので車は使わなかった。
- 避難場所へは歩いて行った。津波が必ず来るとしており、危険なので、周囲の人たちにも車は絶対使うなど言いながら避難した。
- 細く曲がりくねっているので車では行けない。自分も元々車を運転できないので、歩いて避難した。

■ 車で避難した理由

- 避難場所へ歩いて行くには遠い。足腰の悪い人は無理。車で行くのが普通。
- 表向き、行政の指示では車での避難がダメということになっていて、防災訓練でも車は一切使わず、リヤカーで年配の方を運ぶということをしている。しかしこの集落は人口も少ないし、下の方から行くと避難場所までの距離があるので、実際には車で避難することが了解されている。
- 私たちの考える避難場所は安全な高台で歩いて逃げる、が基本。だが、高齢者に関しては車に乗せて逃げる、というのはありと考える。家内は、裏のおばあちゃんは足が不自由なので道路状況を見て、車に乗せた。
- 車を使って逃げた人は途中で高齢者がいた場合、避難先に向かう途中で歩いている人が居たら、その人たちを同乗させ逃げる体制になっていた。
- 地震のときは歩いて逃げろと言われるが、自分の場合は両親とも足腰が悪いので、車で逃げるしか方法がなかった。
- 車で逃げたから早く逃げられた。街だと渋滞して車で流されたという話があるが、田舎だと逆に車の方が早い。

■ 車で避難したことによる問題

- 小学校へ向かう途中の坂が渋滞していた。
- このままではダメだと車で逃げた。途中で信号が止まった。渋滞はなかった。車で走るのも余震で揺れて大変だったと言っていた。

避難した人々の行動

【④ 事前準備】要援護者への支援

■ 高齢者・足腰が悪い人への支援

- 高齢の人や、自力避難が困難な家は、近所の人たちが声を掛け合って助けたり、家族が助けに来たり、スピーカーや近所の声を聞いて自力で避難したりした。職場から息子が母親を助けに来たところもあった。
- 体の不自由な人は、周囲の若い人が担いで避難してきた。
- 老人等を個人の車に乗せて小学校に避難させていた人もいた。
- 体の不自由な人は、家族や周りの人が協力して避難させた。全く歩けない人はいない。毎年防災訓練をしているが、ここは組編制になっていて、組長が把握していて、動けない人がいれば協力して優先的に避難させていた。
- ひとり暮らしや高齢者は民生委員が声がけして避難することになっており、リヤカーで運ぶ訓練をしていた。しかし民生委員は自分の家族だけで精一杯だったようで、民生委員が高齢者等を支援するということは実際にはほとんどできなかった。

■ 子供への支援

- 保育園の園児は保育士さんによって、すぐに避難所に避難していた。親が迎えに来た園児は親に引き渡されたが、そうでない園児はそのまま保育士が避難させていた。
- 小学校の生徒たちを先生が誘導して避難階段を上がって避難した。
- 孫を迎えに行ったが、学校の判断で生徒は帰宅させられなかった。それは小学校が地域の最終避難場所だったため。
- 孫が心配になり、小学校に向かったが、生徒は学校の判断で小学校にそのまま残ることになっていた。

避難した人々の行動

【④ 事前準備】消防団員の行動

■ 水門を閉めに行った

- 「揺れが大きい」と思った瞬間に、「水門を閉めなければ」と思い、消防団の屯所の鍵を持ち、屯所へ向かった。他に何も持たず、消防団のハッピーすら着なかった。
- 消防団員で手動の水門を閉めに行った人が2人いる。流されたが、脇の山にとりついて助かった。
- 息子たちは消防なので水門の方に出て怖い目にあったようだ。でも消防団の人も命を落とした人はいない。息子が危険な所にすぐ行って帰ってこないのではないかと思った。

■ 避難を声かけ・誘導した

- 避難所の広場にテントを張って対策本部を作った。私が行ったときにはすでに団員もいたのでまず状況把握とこれからどうしたらいいか、避難所の指示とか、被害者の避難所への移送を一緒にした。
- 消防団員たちは、車のクラクションを鳴らしながら津波が来るから逃げろと言って促した。防災無線がダウンしていたので、呼びかけるしかなかった。
- 区長や消防団が最後まで一軒一軒回って、丁寧に避難しろと声かけを行っていた。消防団のほかに1年前に部落のお世話をする係の人もあり、一緒に避難訓練もしていた。この人たちが避難誘導もしていた。
- 親戚の家から自宅に戻るころには、車が登り始めていた。消防団は早くてすでに各角に立っていて、避難誘導していた。

■ 自宅等に戻る人の安全確保を支援した

- 避難所から自宅に物を取りに帰りたいという人には、安全確保のため消防団員や公的機関の者が同行していた。

■ 困ったこと

- 途中高齢者をトラックに乗せて避難させた。なかなか言うことを聞かない人もいて、時間がかかった。
- 役場にいても地元と連絡がとれないというのが問題だった。最初は無線が通じていたが、あとになって切れた。
- 逃げろと言っても、絶対津波は来ないと言って逃げない人がいた。無理矢理でも引っ張ってくればよかったが、そこまで権限もなく、個人の判断を尊重したところもあった。それによって津波にのまれた方もいた。

避難した人々の行動

【④ 事前準備】避難場所の状況

■ 寒かった

- すごく寒かったので、木を持ち込んでたき火をした。
- 公園の方では、木を燃して一晩を過ごしたと言っていた。
- 絨毯があるから夜になるまでは暖かったが、夜になると寒かった。毛布を貸し出してくれたので、それに包まることができた。
- 老人たちが集まっていて雪も降ってきて寒かったので、民宿で使っていた30名乗りのバスを持って来てバスの中で暖をとらせていた。

■ トイレが使えなかった

- 避難場所に電気が来ず、トイレなどが使えなくて困った。

避難した人々の行動

【⑤ 防災教育】過去からの伝承

■ 古い津波体験の伝承

- 大きい地震の後には津波が来ると昔から言い伝えがあり、早く避難を始めたようだ。
- 主人は両親から子供のときにチリ地震のことを聞いていて、地震が来たら津波が来るので高台に逃げるように言われていたことを守ろうとしたのだと思う。
- 主人は船乗りで、仕事柄大きな地震が来たら津波が来ると思っているし、昔おじいさんからチリ地震の津波のことも聞いていたので避難指示を出したのだと思う。
- すごい震度だったので、直感で必ず津波が来ると思った。津波については先祖代々の言い伝えがあり「ありがとう縄文人のおかげで救われた」と碑にもなっている。
- 我々は海辺に住んでいるので、昔から親、先輩、先人の方々から、大きい地震が来たら津波が来るというのは教えられる。耳から入ってきて身体が覚えてしまっている。
- 津波が来ると直感した。昔からおばあさんに、前と後ろから来たというチリ津波の話や合わせ津波で亡くなったという話を嫁いでからずっと聞かされていた。
- この地区の人たちは「地震＝津波」と言い伝えられているので津波が来ると思った。父や祖父からずっと言われていた。
- とにかく子供の頃から両親から津波の話も聞いていたし、これまでの歴史からも津波は大きいのが来ると確信していたので避難した。

■ 自らの津波経験

- 前年にチリ地震の津波があって、そのときにも全員避難させた経験があったため避難は比較的スムーズであった。
- チリ地震のときの避難命令で避難した体験の効果もあって、避難したのだと思う。
- 昭和35年のチリ地震津波を経験していたので、「こんな大きな地震が起きたから、絶対津波が来る」と思った。

■ 防災訓練

- 宮城県沖地震を機に、毎年防災訓練をやっているから、条件反射みたいに避難してきた人もいた。

将来に語り継ぐべき教訓

※同一のコメントが複数箇所に記載されていることがある。

将来に語り継ぐべき教訓

【① 避難意識】 津波てんでんこ

■ 自分の身は自分で守ること

- 自分の身は自分で守る、すぐ逃げる、ということが第一。
- 自分の命は自分で守るのが大事。
- 自分の命は自分で責任を持って守る。家を建てるのも逃げるのも自己責任。
- 津波が来たら逃げる。自分の命が大切。最後は自分の判断。人の命を助けていて自分の命をなくしてしまったら終わり。死んでしまったら何にもならない。
- 津波のときは助けている余裕がない。親兄弟であっても、構ってられない。てんでんこ(各自)1人でも逃げるしかない。
- 津波の場合はてんでんこで、誰を待つでもなくまずは自分の命があって、その上で娘なり息子なりがどうなったか確認する。誰を待つとか誰を探すというのではなくて、自分の命は自分で守る。それしかない。
- 以前より避難場所を決めておいて、各人がそれぞれその場所を目指して集合してきたのがよかった。
- 何も持たずに、ひとり、ひとりがすぐに逃げた事がよかった。
- いつ、また津波が来るかわからないが、自分たちは自分でがんばろうと思う。
- 津波を甘く見ないで個々高台へ逃げる。
- ラジオの警報などの前にまず自分で行動する。
- 1回目の避難場所までは声かけをしていたが、いざ波が来たら団体行動というわけにはいかない。ただ「ほれ逃げろー！」と言うだけであって、あとは自分が逃げるので精一杯。

将来に語り継ぐべき教訓

【① 避難意識】津波てんでんこ

■ 地震が起きたらすぐに高台へ避難すること

- 地震が起きたら人に言われる前に逃げる、すぐに高い所へ上がるということが徹底されていた。
- 各自で上へと逃げるべき。
- すぐ近くの山に登るという避難の方法がよかった。
- 地震が来たら高いところに逃げるだけ。
- とにかく、迷わず、上に、高台に逃げる。
- 声を掛け合うのもいいかもしれないけれど、皆が「高い所へ」という意識があれば、それぞれ逃げられる。
- 避難するときは、早く高い所へ行く。「避難は横ではなく高い所へ行く」こと。
- 大きい地震が来たら、高いところに逃げるべき。
- まず、高台に逃げること。
- 地震が起きたら高い所へ逃げる。
- 地震が来たら、まず何も持たなくて身体だけでいいから高台に逃げないといけない。
- 地震が起きたら木が生えている高台に逃げる。木がない所だと地滑りが起こるし、木があればつかまって助かることもできる。
- 地震が起きたら何があっても逃げるべきだ。海の近くにいればいるほど。
- 「ここなら大丈夫だろう」的な計算ではダメで、避難場所に決められている以上の高さのところに逃げるべきである。
- 地震にあったときは大小に関わらず、高台に逃げる。津波の性質を考えて、適切な高台に避難する。

■ 「地震＝津波」と意識すること

- 地震が来たら津波と思え。とにかく早く避難すること。
- 地震が起きたら震源地を確認し、取るものも取らず、まず避難すべき。
- 地震が小さくても大きくても、逃げるということが大事。
- 地震の後は津波が来ると思うこと。
- 地震が来たら津波と常に頭に入れておき、すぐ避難することだと思う。

将来に語り継ぐべき教訓

【① 避難意識】 津波てんでんこ

■ 冷静な判断・行動

- 冷静に、客観的に、自分も周りも見えて行動すること。
- 現実に恐怖を感じると訓練どおりにはいかなかったが、「はっ」と我に返って避難場所を思い出し、たどりついたのがよかった。
- 自宅へ戻りたかったが、諦めて避難所へ向かったのがよかった。戻っていたら津波に巻き込まれていた。
- ヘルメットもかぶってテンションが上がってくると、何かしなくては、という思いが出てくるので避難場所から戻って救助を、という行動に出たが、そこはやっぱり冷静さが欠けていた。きわどい思いをした。正義感によって、ひょっとしたら命を落としかねなかった。

将来に語り継ぐべき教訓

【② 情報伝達】 情報提供・入手方法

■ 防災行政無線の機能維持

- 携帯は繋がらず、無線だけが頼りで、無線局から「大津波だから逃げろ」という津波警報を聞いた。
- 防災無線は電気が切れると全く役に立たない。

■ ラジオの受信環境の確保

- テレビがダウンするのでラジオが頼りになるが、三陸沿岸部では日中電波状態の悪い所が多い。スイッチを入れたら、どこでも聴こえるよう、ラジオ中継局の整備など必要だと思った。
- 三陸海岸は山(の影)に入ったらラジオの電波が悪く、なかなか情報もつかみづらい。
- テレビもラジオも遮断されてしまい、何も見られなかった。

■ 携帯電話の通信環境の確保

- 停電のため、情報が伝わってこなかった。電気に頼らない情報伝達を整備することが必要。
- 携帯電話はすぐに通じなくなった。
- せめて電話が通じあえば、いろいろ情報が得られたと思う。
- 電話も相当通じない。携帯を持っていたてもダメだった。
- 携帯は1ヶ月くらいダメだったんじゃないか。全然通じなかった。
- 危険なところにいる方には携帯を持たせて避難指示をするのもいい方法の1つかと思った。
- 携帯電話が役に立たなかった。
- 地震の後は携帯が繋がらず心配だった。
- 夫婦で避難先が違ったため、当時まったく連絡がとれなかった。
- 携帯電話も通じなくて、山形に嫁いだ娘を安心させることも出来なかった。
- 安否の確認をしたかったが、携帯電話が繋がらなかった。

将来に語り継ぐべき教訓

【② 情報伝達】 情報提供・入手方法

■ 警報のあり方

- 地震が来たらすぐに避難すること。すぐ来る津波は小さい。大きい地震ほど波がいったん引いて津波が来るまで時間がかかる。そのときの海の状態を知らせる伝達手段を考えた方がよいと思う。
- 私に「津波が来るぞ」と声を掛けてくれた人は消防団ではない普通の人だったと思う。土手で見ていた人など、声がけする人は身をもって見た人でないとできないと思う。自分の目で津波を確かめないと動かない、警報だけではなかなか動かない。

■ 大津波警報が安心材料として逆機能した例

- 情報機関が発信する津波の高さに関する情報は信頼しないほうがよい。どのような情報であったとしても自分の身を守るために逃げる、高台に避難するということしかないと思う。まずは逃げるということが一番。
- 警報などの情報はあてにしないこと。その情報を鵜のみにして、油断から亡くなった方もいる。
- 3mと警報で聞いて、「防潮堤は越えない、大丈夫」と思い、家から出ずに亡くなった人もいる。
- 「津波の高さ60cm」と言っていた市の放送を聞いた。そのうちに「3m」とかって話になった。みんなたいしたことないな、という感覚を持っていた。
- 「何m観測」というのは余計な情報だ。どんどん押し寄せている最中だったら「巨大な津波が押し寄せています。すぐに逃げてください」の方がいいと思う。緊急は緊急なりの放送の仕方がいい。
- 漁村センターに向かう途中「何十cmかの引き波を観察」というようなのをラジオで聞いたような気がする。「それもたいした事はない」と判断する材料になったと思う。
- 防災無線の放送に緊迫感がなかった。「早く逃げろ！」と呼びかけてほしかった。
- 警察や消防の呼びかけは「高いところに逃げた方がいいですよ」という感じで、「逃げろ！」ではなかった。危機感のない語り方だった。
- 警察や消防が避難を呼びかけていたが、緊迫感がなかった。優しく言っていたらあまりたいしたことがないと思ってしまう。

■ 大津波警報が避難のきっかけとして機能した例

- 行政の放送が命令口調になって、危機感を持った。切羽詰まった感じがあり、またサイレンの効果もあった。
- 役場の放送が、戦争時の空襲警報のようなサイレンになり、「高台に避難せよ」と強い口調になった。その放送で避難の必要性を感じた。

将来に語り継ぐべき教訓

【③ 避難場所】 避難場所・避難路のあり方

■ 適切な避難場所の例

- すぐ近くに山があること、避難場所が近いこともよかった。
- 学校から避難階段ですぐに避難場所に行ける。

■ 不適切な避難場所の見直し

- 以前指定されていた避難場所は一部の集落から避難する際に波にのまれてしまう可能性が高いということになり、違う広場を避難場所として指定した。
- 事前に指定されていた避難場所は津波からの避難場所としては不適切だった。自宅がある地区の指定避難場所に行くためには橋を渡って川を越えなければいけないが、川を越えるのは危険。
- 市指定の避難場所は集落から遠いので、ワークショップ活動で話し合い、とっさに避難する場合は近くの高台に行く決めてあった。
- 以前指定されていた避難場所はハザードマップで浸水することだったので、避難場所を変更した。
- とりあえずの避難は車を使わず、歩いたり走ったりして行ける場所がよいのではないか。
- 今回多くの人々が避難した場所は、津波にのまれて孤立してしまった。陸続きの高いところに逃げないとだめだと思う。
- 避難訓練には毎年参加しているが、避難場所が実際の避難には向かない気がする。東日本大震災のときは、訓練の避難場所ではなく、現在地から一番近い高台へ向かった。指定された避難場所は海へ向かっていく道路なので津波に巻き込まれる恐れがある。
- チリ地震の津波で安全だった場所を避難場所に指定していたが、低い場所に避難場所を指定するのは間違っている。
- 今回は東日本大震災を元に作るかもしれないが、またそれ以上の津波が来るかもしれない。

■ 避難場所に必要な設備

- 雨が降ったり、雪が降ったりしたときにも対応できるよう、屋根がかかった場所が必要である。
- 第一避難場所の場合、あまり贅沢は言えないが、雨や風除け、トイレを設けて欲しい。
- 避難場所は例え仮設でも建物を建てて、トイレや暖房等の設備は必要だ。

将来に語り継ぐべき教訓

【③ 避難場所】 避難場所・避難路のあり方

■ 海に向かう道の回避

- ハザードマップの避難道路を通して駐車場に行こうとは思わなかった。自宅は高い場所にあるのに、一度低い所へ下りてから上へ登っていく経路だったのであまり現実的ではないと思っていた。
- 海へ向かっていく道路では津波にのまれてしまう。
- 前進すれば波が追いかけてくることがあるから、高いところでも、脇の方に上がる方がいいと思った。

■ 津波の到達状況を確認しながらの避難

- 海が真正面にあり、高台から海が見えたので、自分の目で津波の状況を見て早く避難できた。
- 一番条件がよかったのは、海の状況が全部把握できたこと。引き波の状況を見られたので、さらに上に上がるという判断ができた。

■ 渋滞の回避

- 避難道路を作って渋滞しないようにするなどの工夫も大切だ。近くに大きな建物を作って避難できる場所を確保したほうがよいと感じた。津波がきても流れないような頑丈な建物があれば安心できる。
- 地震のときは主要道路に逃げる車が集中して渋滞してしまったので、幅広い避難道路が3本くらいは必要である。

■ 今後の避難路整備のあり方

- 防潮堤よりも避難道の確保や道路のかさ上げなどをする方がいいのではないか。
- 高台に移転することもそうだが、それよりもっと高いところに逃げられるような避難路の整備が必要だ。

将来に語り継ぐべき教訓

【④ 事前準備】津波避難訓練や平時からの準備の重要性

■ 津波に対する意識啓発

- 防災訓練のおかげで、住民の頭の中に「津波」という意識があった。
- 普段から津波に備えて訓練を徹底していたことがよかった。やはり、地震が来たらすぐに逃げるということに尽きる。この周辺の住民には昔から「高い所へ、高い所へ、一歩でも二歩でも高い所へ」ということが徹底されていると思う。
- ワークショップや避難訓練を続けているうちに住民の心に意識がめばえ、津波が来るとそれぞれ考えた。
- 避難訓練は常に津波対策を行っているので、地震が来ればすぐ津波という意識がある。
- 防災訓練は、逃げ方を考えるのに役立つので参加する。
- 著名な大学の先生に講師として参加してもらい、ワークショップを開催した。自分の気持ちにも影響があったし、住民の方にも関心を持ってもらえた。ワークショップがあったからこそ、被害が最小限だったのかと思う。
- 毎年の避難訓練、マニュアルの成果で、みんな自主的に避難したのがよかった。
- 地震が来てからすぐ避難したことがよかった。これは津波訓練を行っていた成果だと思う。
- 日頃から津波を想定して避難訓練を行っていたので、津波に対する意識が強かったのがよかったのだと思う。

将来に語り継ぐべき教訓

【④ 事前準備】津波避難訓練や平時からの準備の重要性

■ 避難場所・避難路等の把握

- 津波避難訓練によって避難場所や民生委員による高齢者の支援・誘導方法を確認した。
- どこに逃げたらいいかというのが訓練で把握できて、どこに逃げるか迷わずに済んだ。
- 避難訓練をやっていなかったら、いざどこを上がったらいいいのかわからなかったと思う。
- 夜中にサイレンが鳴って、朝、小学校とかの学校の子たちが避難する、というような習慣はあった。
- 避難場所は、区域で決まっている。ここら辺の人はここへ行きなさいというのがある。
- 避難訓練に参加している人は早く避難したが、参加していない人はすぐ近くなのに来なかったりした。
- 下校時の訓練のときは地域の子供たちを見守る防犯隊の人たちと一緒に各地域ごとに一緒に帰りながら訓練をしていた。だから、子供たちは地震が来たら何処へ行くのか知っていた。
- 普段から、いずれはそこに逃げると言うことがなければ、いざというときに迷ってしまう。
- 逃げるルートは決めておく。近道を考えておく。この近道が大切だと思う。すぐいける道、裏道、細い道、自分が行ける道、車が通れる道とは限らず考えておくこと。
- (集落で防災に関するワークショップがあり) 大きな図面を作って「どういう津波が来たら、どこに逃げるか」を書き込んだ。図面を前にすると、自然と地区の地形が頭に浮かんだ。
- 普段から避難訓練にも出ていた。訓練で決めていた避難先の高台にすぐ逃げることができた。

将来に語り継ぐべき教訓

【④ 事前準備】津波避難訓練や平時からの準備の重要性

■ 声かけ体制の確認

- 毎年防災訓練が徹底されていて、万一の地震のときは高台に逃げるように近所への声かけ体制についても訓練していた。
- 自主防災組織で声かけ担当を決めている。声かけの訓練が役立った。
- 年1、2回の防災訓練が役立ったと思う。声かけしたときに素直に聞いてくれた。
- 通常の防災訓練を毎年やっているから、みんなが声を掛け合って避難できた。
- 防災訓練は絶対に重要。班分けをしていて、不自由な方たちへの役割分担をしていた。その効果は非常に大きかったと思う。
- 隣近所の声かけが1番。今回は消防団や若い人たちが避難を呼びかけたり、お年寄り、体の不自由な方の避難の手助けをしてくれたのがよかった。
- 日中仕事をしている人は部落にいない。そうすると、隣近所が協力し合って声かけしながら逃げるしかない。
- 集落にまとまりがあり、一致団結して年寄り、体の弱い人を優先的にフォローしたことがよかった。

■ その他効果

- 町の対応は早かったと思う。それは訓練のためだと思う。バスを出したりする訓練もしていた。炊き出しとかのこともしていた。
- 防災訓練は役立っていると思う。やはり今でもガスを使っても、すぐに元栓を閉めたりしている。やはり本当に怖い。

■ 訓練どおりにはうまく機能しなかったこと

- 避難訓練はしていたが、とっさには何もできなかった。何をやっていいか分からなかった。
- 防災訓練では自力避難困難者は役員で分担を決めていたが、震災当日は出来なかった。マニュアルどおりには行かない。自分の家族を守るのに精一杯。
- 防災組織は設立されており、避難所の担当等を事前に決めていた。しかし担当を決めただけで、誰もその役割はできなかった。
- 婦人部で炊き出しの訓練もしていた。実際には想像以上で炊き出しが出来るような状態ではなかった。
- 訓練どおりの行動は出来なかった。後で危ないところにいたと怒られた。

将来に語り継ぐべき教訓

【④ 事前準備】津波避難訓練や平時からの準備の重要性

■ 過去の訓練への反省

- 昔から津波訓練をやっていたが、だんだん形式的になっていた。
- 避難訓練はもっと大きくやればよかった。ただサイレンが鳴って、てんで行って、眺めて、タバコを吸って、喋って、終わりだった。
- 日ごろからの防災訓練を通してお互いに顔を知っておくことも大事だと思う。
- 実践に伴う訓練ではなく、訓練のための訓練という感じだった。今後は考え直さなくてはいけない。
- 避難訓練に参加し、災害が起きたときに自分の逃げ場所くらいは確保しておいた方がいい。

■ 訓練への参加を促すにあたっての課題

- この地域には全員にヘルメットと防災ザックを1世帯に一つ配布してある。訓練に参加して初めてもらえるようにした。この辺が他の地域と違ったやり方で、意識を高めた。訓練は参加者が得をするような工夫をしなければいけない。
- 海側の区域は大体70%くらいは訓練に出ている。
- 高齢者は避難訓練にあんまり出ない。
- 訓練時にサイレンが鳴っても、海岸で仕事をしている人も含めて本当に集まるのは少ない。
- 避難訓練等は特別には実施していなかった。参加した記憶がない。自治体発行の津波のハザードマップも知らない。
- 地域の防災訓練は限られた人しか参加していなかった。
- 避難訓練はこの辺りは毎年10人くらいしか出席してなかった。毎年来るのは同じ人だった。
- 毎年避難訓練も行われていた。それでも風化していく。私が勤めていた頃に「今朝眠い。避難訓練だったから」と言うと、「え？ あんたのところではまだそんなのやっているの？」と山の方に住んでいる人たちに言われた。同じエリアなのに、そういうギャップはあった。
- 若い人はあまり行っていなかったと思う。

将来に語り継ぐべき教訓

【④ 事前準備】津波避難訓練や平時からの準備の重要性

■ 避難時の持参物の準備

- 避難の際に持参する避難袋・バッグを用意しておくこと。
- いつ災害にあってもよいように日頃から持参品を準備しておく。
- 非常用のザックに2、3日どこに泊まってもいいように、常に準備しておく。ヘルメットも準備しておいた方がよい。
- 判子と通帳も持った。通帳と判子はまとめてあった。
- 普段から通帳や現金、保険証券とかをひとつにしていた。「いつ地震があっても逃げられるように」準備してあったので、すぐにそれを持って逃げようと思った。
- 持ち出す物を準備しておくこと。
- まず日頃の備え。備えあれば憂いなし。備えあればというのは地震保険もある。
- 日頃から、書類や下着など大切なものをリュックにいれて準備しておいたので、それをすぐに車に積んで逃げることができた。
- 必要な物や書類や肌着、パンツなどは常に用意しておかないといけない。

将来に語り継ぐべき教訓

【④ 事前準備】車による避難

■ 車による避難に関するルール(禁止)

- 車での避難は禁止していた。理由は、海(海岸沿い)から高台(山側)まで700mしかなく、津波がくるまでの「30分間」で、車がなくても、充分逃げられる地形だから。
- 車での避難は禁止されていたので徒歩で行った。
- 自主避難訓練としてやっていてよかったのは、ここに避難するときに道路が1本道路だから、車ではここまで避難しないということを決めていたことである。車いすなど、本当に人が手助けしないとイケない人以外はここに車は乗り入れしないことになっていた。

■ 車による避難に関するルール(禁止せず)

- 高齢者を乗せた車はOKという話はしていた。
- 場所によっては車の通れない避難所もあるので、そういう所は車では逃げられなかったと思うが、避難の際に車を使ってはいけないというルールはなかった。
- 要介護者の人もいたので、全面的に車を禁止にするのは難しい。
- 自分は歩けないので、車に乗るなど言われても避難するのには車でなくては行けない。
- 避難、防災にはこれといった決め手はない。住んでいる土地によって、事情が違うので、ケースバイケースで防災対策をするべきである。車はダメ、歩いてはダメなども決め付けることはできない。
- 車で避難してはいけないと決めていたことは知らなかった。決めた人の勝手だ。

■ 車避難による被害

- 車が数珠つなぎになっていた。
- 県道は車で避難した人のラッシュだったと聞いている。
- 車で避難して渋滞に巻き込まれて逃げ切れず亡くなっている方がいた。車を捨てても高台に逃げた方がいいと思う。

将来に語り継ぐべき教訓

【④ 事前準備】避難支援者のあり方

■ 水門閉鎖の方法

- 水門を閉めに行って津波に遭う危険性が高い。水門の鍵を持つ担当者は事前に決めてあったが、地震発生時にその担当者がどこにいるかは分からない。その人を見つけるのに時間がかかってしまう。ルールの見直しが必要。
- 岸壁に行って、水門を閉めるのも酷だ。今後はああいうことはしないようにした方がよい。

■ 消防団・自主防災組織の活動

- 自主防災や消防団の活躍が一番よかった。弱者の人たちを回って、犠牲が最小限に抑えられたと思う。
- 自主防災組織を5年前に立ち上げ、毎年避難訓練を全員参加でやっていたことはよかったと思うし、大変役に立った。
- 防災組織を立ち上げて毎回訓練していたが、昨年チリ地震でも実際に避難していたため部落では被害は少なかった。訓練に参加しなかった人が被害に遭ったようだ。
- 震災の時通信手段は何もダメだったので、常に自主防災組織を立ち上げて、地震の際はどこに逃げるかを徹底して、連絡網など約束事を決めておくことが重要だと思う。

将来に語り継ぐべき教訓

【④ 事前準備】避難支援者のあり方

■ 住民同士の絆の強さ

- 震災前から、住民同士の「絆」が完璧だった。
- 何がよかったか聞かれて一貫して答えているのは、地域力、コミュニティ、絆、つながり。あとは言い伝えを守ること。
- 地域のつながりがとても強い。「避難すっぺ」と互いに声をかけ合いながら逃げる、という気風がある。
- 避難するときに周りに声をかけたのがよかった。老人の方が避難しなかった人がいたが、声がけをして避難させた。
- 周りの人たちが互いに声がけできたこと。都会だと隣に誰が住んでいるかもわからないだろうが、どこの誰が住んでいるかはすぐにわかる。
- 個、公、あらゆる縁(えにし)を大切にすること。1人では生きていけない。
- 常に周りの人とのコミュニケーションを図り、顔なじみであるのが一番である。
- 周囲の人たちが集団行動に協力的で、自主的に避難してくれた。自分勝手ではなく皆で一緒に行動しようという気持ちを皆が持てた。
- 地域の結束が強く、声を掛けながら避難したり、避難所に行っても知っている人の顔ぶれが見えないと言って探したりしていた。
- 親戚縁者で成り立っているところだから、「あそこのおばあさんを連れて行こう」など、団結した行動が行われていたと思う。

将来に語り継ぐべき教訓

【④ 事前準備】 災害時要援護者への支援

■ 個人情報の持ち方

- ひとり暮らしの家や高齢者・障害のある方などの情報が個人情報に該当するために、民生委員しか把握していなかった。しかし民生委員だけで支援を行うのには限界があるため、組織として個人の情報を統括することが必要。
- 自力避難が困難な方は民生委員を中心に周囲が把握していた。でも町内会にまではプライバシーの問題ではっきりとは伝わってこない。でも命に関わることなので、今後はそういう方をどのようにサポートしていったらよいのか皆で話し合っていきたい。

■ 自力避難困難者の誘導

- 私の担当する区域は、逃げるときに誰が誰を助けて逃げるという固有名詞で決まっている。個人名を消した住宅地図を利用して、経路まで書いてAさんがBさんとCさんのところを回ってというのも全部書いてある。それは本番に活かされている。
- 地震発生時3ヶ月前に「要援護者（＝身体障害者など自力での避難が困難な方々）については、軽トラックに乗せて避難させる。軽トラックでの避難を優先させること」と決めていた。
- 町内を12班に分けて、誰が誰（＝どの要援護者）を助けるかを決めていた。
- 弱者、老人世帯、身障者については常にどこに住んでいるのか把握して心構えしておかなくてはならない。
- 集落の役員の人たちは何かあったときに身体の不自由な老人の人やひとり暮らしの人に声がけをすることになっている。そしてもし仕事をしていてそれが無理であれば、近所の日常いる人が声がけするという風になっていた。
- 公民館館長が年寄りのある家を一軒一軒回った。
- 日頃から、例えば「あそこに動けばおばあさんがいるから、連れて逃げる」など担当を決めている。

将来に語り継ぐべき教訓

【⑤ 防災教育】記録に残すことの重要性

■ 過去から学んできたこと

- 明治も昭和も津波に遭ったので、皆が意識を持っていた。
- 大きな地震が来たら高い所に逃げろというのは子供のときから聞いていた。
- 昭和8年と明治35年のときの津波の記念碑がある。そこに「地震があつたら津波。津波が来たら高い所へ」と刻んである。
- 昭和8年の津波の記念碑に「大地震の後には津波が来る。地震があつたら高い所に集まれ。津波に追われたらどこでもここくらい高い所に。遠くに逃げても津波に追いつかれている。高い所を用意しておけ。県指定の住宅適地より低い所に家を建てるな。」という碑文が残っている。今回の津波もまさにそのとおりだった。
- 自分たちは小さいときから昭和8年の三陸大津波に遭った年寄りの人たちから聞かされていた。
- 子供の頃から過去の津波の話を聞いていたし、チリ津波のときには担任の先生が写真を撮ってきて、被害状況を見せてくれた。
- 何年か前、チリで地震があつたとき、津波に備えての避難をしており、その経験も役立っている。
- チリ地震の津波は自宅の前の道路まで水が来たが、揺れが大きかったので、もっと大きな津波が来ると思った。
- 1分くらい揺れたら、必ず津波が来ると思えと学生時代に教師から言われたことを直感的に思い出した。
- 子供のときから「地震のときには大きな津波が来る。小さいのは少ししか来ないけど、大きなのは油断してはならない」と言われていた。
- この地域では、生まれてこの方、昔の人からの言い伝えで、地震のあとの津波が身にしみているのだと思う。都会のように地震が怖いではなく、地震のあとの津波が怖いというのが語り継がれている。
- 以前より「井戸の水が引けば津波が来る」と言われている。
- 津波が30分で来るというのは昔から言われていて先代から聞いていた。
- 津波が30分で来るということや避難所はどこかということは皆知っていた。
- 生きたかったらとにかく逃げる。しかも津波が来るまでの「30分」で。30分というのは、明治の地震でも昭和の地震でもそうだった。とにかく30分が勝負だと思った。

将来に語り継ぐべき教訓

【⑤ 防災教育】記録に残すことの重要性

■ 過去から学んできたこと(続き)

- 昔から戻った人は生きて帰った人はいないと言い聞かせてられてきた。今度の津波でも、行った人は、そのまま戻らなかった。
- 海岸で津波だとなったら、ここの高台まで走ってくるな。付近の高いところに登りなさい」と言われていた。子供だから戻って来ようとするけど、「そういうことはするな」と親からよく言われた。海岸で津波だとなったら、近くに登りなさいと教育されていた。
- 避難後に自宅に戻る人はいなかった。物を取りに行つて命を落とすということは、耳にタコができるくらい聞いていた。
- 船は海岸に置くと津波に流されるので、その前に船を操船して洋上に出して、危険な思いをしながら船を守った人も結構いた。昔から、津波が来る前に船を大海に出せばいいという教えがある。ただ時間的なものを間違えると津波をまともに被ってしまう危険性がある。

将来に語り継ぐべき教訓

【⑤ 防災教育】記録に残すことの重要性

■ 東日本大震災の経験を残すためにすべきこと

- 写真や記録などの形で残し、語り継ぐことが必要。
- 石碑を建てて、例えば、「地震・雷・そら津波」のような教訓となる言葉を後世に残すことが重要。
- 話だけで伝えるのはと思って、従兄弟や子供に本を買った。
- 幼い子供でもこの経験は覚えている。必ず未来へ語り継いでいき、被害を最小限に抑えるべきだ。
- これまでも津波のことは親などから聞いていたし、海岸から山に避難しろと言われてきたが、ただ言葉と体験では違う。今と昔は違って実際に映像が出るから、映像で伝えていく方が迫力があると思う。今までにない場面の写真も結構出ているから、そういう資料がこれから大事になると思う。言葉だけでは津波の恐ろしさはわからないし、映像でどんどん教えてほしい。
- 今回の津波の映像を流すことにより啓蒙啓発をしていくのが一番重要だと思う。
- 今回は昭和の津波と違って映像も沢山あるし、家族を失くした人も沢山いるので、3月11日を特別の日にして、そういった部分の生の声、生の映像を、確実に後世に伝わるように、と思う。
- 小学校でも訓練のときは、同時に口頭で傳承していく教育をやっていくのがよい。
- 今回の経験を語り継いでいくべきだと思う。
- 高齢者という人生の先輩は、子供たちに言い伝えていくべき。
- これからも自分たちが生きている限り、孫も経験したことだから絶対にこれからも伝えていかななくてはならないと思っている。子供たちには「津波はまたいつか来る」ということを伝えるための小冊子が以前から作られている。
- 経験と言い伝えが大事。
- 本やDVDを買い、事実として伝えている。逆に生きる糧になると思う。伝えなければ実際に何かあったときに逃げられなかったりする。「2度とないこと」ではないんだから、貴重な経験として、トラウマに感じないように言っている。
- 集落ごとの何箇所かに、今回の津波の到達地点を作って、今後伝えていくべきである。
- 文章で今回の津波の情報を残して、未来に伝えていき、風化させないことが大事。
- 3月11日の状況を後世に伝えるために、自主防災の組織を立ち上げた。
- 学校で使う教科書に災害のことを盛り込んで欲しい。日本という国は火山の被害もあるし、地震、津波、放射能。災害に対する対策、避難、備えを身につけられるようになることが大事。

将来に語り継ぐべき教訓

【⑤ 防災教育】記録に残すことの重要性

■ 防災教育の効果

- 昭和8年の津波を題材としたオリジナルの劇を小中学校で演じた。このことを含め、子供たちは津波について学ぶ機会があり、津波に対する意識が高かった。
- 両親からは明治29年の津波の話は聞いていて、家庭でも話題になる。だから、地震で大きく揺れたら絶対津波が来ると思った。
- 小さい頃から年寄りや親から言い伝えられているので、集落の人々は津波への関心が強く、避難行動は早かったので、助かった。

■ 記録に残すことの難しさ

- 今回の津波を経験した人はいち早く逃げと思うが、次の世代で津波を見ていない人は、いくら写真で見ても実感しない。
- 3.11から1年以上経って、すでにもう風化している感じがある。

将来に語り継ぐべき教訓

【⑤ 防災教育】危険行動

■ 過去の経験による逆作用

- 自宅へ残っていた人、自宅へ戻った人は、「チリ地震のときも大丈夫だったから、今回も大丈夫だろう」と安心する気持ちがあったと思う。
- 昭和35年のチリ津波の経験が頭にあり、2階にいれば大丈夫だなと判断して亡くなった人もいる。
- 昭和35年の津波を経験して、そのくらい安全な高さだということで、コンクリートで2階のものを建てた。そのせいで助からなかったという人がいる。
- 今までの津波から判断して「ここまでは来ないだろう」という経験が過信につながり亡くなる方が多かった。
- 避難マップの要介護者に対する隣近所の声がけの部分はある程度できたがその部分と同時にやはりより高台に、という基本的なことができなかった。チリ地震も体験している人生の体験の豊富な人が逃げられなかった。
- 過去の経験で、津波が来てもたいしたことはないと思った人がけっこういたが、決して油断しないこと。
- 数十cmの津波でも警報が出て「慣れている」ことが、多数の死者を出すことになってしまったと思う。
- 自分の記憶・経験から判断しないこと。
- このあたりには地震があっても津波は来ない、というイメージが強すぎた。

■ 根拠のない判断

- 津波を侮らない。警報が出たらすぐに避難をする。
- 「自分だけは大丈夫」という根拠のない思い込みは持たない。
- 大きいのが来たらとにかく逃げてとかは言っていたけど、家が高いところにあるから、まさか目の前に来るとは思っていなかった。
- 一度、避難しても「まさか、大きな津波は来ないだろう・・・」という甘い判断で、家に帰ったりしてしまい、津波にのまれてしまった。
- 高台に逃げずに2階建てのビルに逃げた人が津波の被害にあった。「ビルであればいいだろう」という甘い考えがあったのだろう。
- 昭和35年のチリ津波のあと、防浪堤ができたから少々きても大丈夫だと思っていた。
- 下の方が人が全員無事で、逆に上の方に家がある人は、そこまで来ないと安心したため、亡くなった。
- 2階にいれば大丈夫という過信というか油断があった。人生経験上、家までもっていかれる津波に遭った人は誰ひとりいない。
- 自分は大丈夫だと思っている人がいたら、周りの人みんなでも強引にでも避難を促せばよかった。

将来に語り継ぐべき教訓

【⑤ 防災教育】危険行動

■ 海に近付くこと

- 波を見に行く、といったことを絶対にしない。また、自宅にも戻らない。
- 船を持っていると、どうしても船を守りたくなる。でも、危険なので次からは船を諦めて逃げることにする。

■ 荷物を取りに戻ることに

- 家には絶対に物を取りに行かず、防災ザックとヘルメットを被って高いところにすぐ逃げる。
- 大事なものがあるからといって、家に戻ってはいけない。欲がからむと死んでしまう。
- 津波が来ることを考え早め早めに避難し、荷物を忘れたからといって取りに行ってはいけないと伝えていきたい。
- これだけの地震が来たら何も持たなくていいから逃げろ、ということしかない。絶対に1個持つと2個持ちたくなる。だから戻ってはいけない。
- 高台に避難して、まだ津波が来ていなかったのも自宅に戻って何か取ってこられるかと思ったが、心の中で葛藤しながらも、戻らなかった。
- 自宅には戻らない、欲を出さないで戻らないということを語り継ぐべきだと思う。

■ 第二波の脅威

- 第一波より第二波の方が大きかったように感じた。
- 1回目より、2回目で上がってきた。1回目の津波では流れなかった。2回目の津波で流れた。2回目の津波は25m以上上がってきたんじゃないか。
- 第一波は激しい波じゃなく、第二波で家を持って行かれてしまった。
- 第一波の後に家に戻ってしまって、流された人もいた。
- 津波はいったん収まったと思うとまた来るから、下がっちゃいけない。

将来に語り継ぐべき教訓 その他

■ 地域からの転居・高台への移転

- 子、孫には危険なところには家を建ててほしくないと思っている。息子に、自分が死んだらこの家、土地を処分してどこか安全な場所に住んでほしいと言っている。
- 危険な場所には家を建てない。娘たちは、他へ嫁いでこの地を離れてほしい。
- 住居は高い安全なところに住むようにして、今回被災したところは絶対に住居は駄目だと思う。
- 小学校も中学校も高台にあって、みんなが高台で暮らす街づくりをした方がよい。
- 被災後にどうやってまた街をつくっていくのか、できるのであれば将来的なことを考えても、高台移転という計画で動いたほうがよい。
- 津波の来ないところで生活する、高台にあがる。明治や昭和の津波以後、津波の来るところには住むなと強制的に高いところに家を建てさせた。その対策が今活きている。
- 新しく家を構えた人は、復興地より下に家があるので今回の津波被害にあった。

■ 防潮堤建設の懸念

- (新たな防潮堤建設計画について) 高くなれば水が溜まってしまう。引き潮がなくなってしまう、溜まった水のままでそのうえに次の波が来ると、どんどん増えていって、奥に行ってしまう。今回防潮堤にぶつかった波が回って被災しているのを見た人がいる。防潮堤の高さを上げればいいというものではない。

■ 今後の津波対策の考え方

- 以前あった災害を基準にしない。昭和8年津波やチリ津波など、前の災害を参考にして物事を考えてしまうが、実際に起きる災害の規模は分からない。